ル踪ニテ拾ヒタリトテ、骨牌一枚ヲ予ニ與フ、其形圖ノ如シ、〇圖略傍ニ燕青ト書キタルハ、浪子燕青ノコトナル可シ、

〔屠龍工隨筆〕かるたは蠻夷より來りて、十とキリとは歩武者、十一は騎馬武者にて、其外はことごとく楯の模樣なり、

〔雍州府志七土產〕賀留多〇中略　賀留多札百枚、半五十札書古歌一首之上句圍並床上、中央殘隙地、是謂地、又半五十枚書上歌之下句、是謂出、前所謂中央隙地出置所應手之下句一枚、圍坐人各視之、所在床上之上句、與今所出置之下句、有相合者則取之、然後其所合取之札算多者爲勝、算少者爲負、是稱歌賀留多、元出自貝合之戲者也、

〔女用教訓〕繪本花の宴〕つねまつ。

歌がるたの事なり、百人一首のほど、小町花合、三十六歌仙、そのたび〳〵數々つねにもてあそびて、そらんじぬべし、

〔春湊浪話下〕歌がるた貝覆

宇治十帖に、八宮のひめ君兄弟はかなきことをも、もとするをとりていひかはしといへるを、花鳥餘情、細流抄等に、歌などの上句下句など讀こと、注し、枕草子に歌のもとを仰られて、是が末はいかにと仰らるゝに、すべて夜ひる心にかゝりて覺ゆると見えしことなど見ゆる、此歌のもと末を覺えん料に、今の歌がるたといふは出來りけるにぞ、其比よりのものなるべし、此本に末を對するといふ事より、對末の歌がるたなどいふ名もあり、さらば宇治十帖、枕草子などに見えし歌がるたのおこりし根元ともいふべし、かるたとは輕板といふ言葉の異なるにや、

〔貞丈雜記八調度〕一歌がるたといふ物は古なし、近代出來たる物也、本は貝おほひの貝より思ひよりて作りたる故、本名をば歌貝と云也、又伊勢物語に松明つたいまの事の炭にて、歌の下句を書たる事